

宮城谷昌光

Miyagitani Masamitsu
Sōgen no Kaze



中

草原の風

宮城谷昌光

Miyagitani Masamitsu
Sōgen no Kaze



草原の風



中央公論新社

宮城谷昌光

昭和20（1945）年、愛知県蒲郡市に生まれる。早稲田大学文学部卒業。出版社勤務のかたわら立原正秋に師事し、創作を始める。平成3年『天空の舟』で新田次郎文学賞、『夏姫春秋』で直木賞を受賞した。続いて5年『重耳』で芸術選奨文部大臣賞、12年には司馬遼太郎賞、13年『子産』で吉川英治文学賞、16年菊池寛賞を受賞。同年『宮城谷昌光全集』全21巻（文藝春秋）完結。他の著書に『孟嘗君』『奇貨居くべし』『三国志』など多数、また『風は山河より』など日本の歴史に題材をとった作品もある。

草原の風 そうげんのかぜ 中巻 ちゅうまかん

二〇一一年一月一〇日 初版発行

著者 みやぎたにまさみつ
宮城谷昌光

発行者 小林 敬和

発行所 中央公論新社

〒一〇四一八三三〇

東京都中央区京橋二一八一七

電話 販売 〇三ー三五六三ー一四三一

編集 〇三ー三五六三ー三六九二

URL <http://www.chuko.co.jp/>

DTP 風下英治

印刷 三晃印刷

製本 小泉製本

©2011 Masamitsu MIYAGITANI

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.

Printed in Japan ISBN978-4-12-004302-4 C0093

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り扱いいたします。

●本書の無断複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

草原の風
中巻
目次

拳きよ兵へい……………7

明暗めいあんの戦場せんじょう……………57

昆陽こんようの戦いたたか……………105

王莽おうもうの死し……………155

北きたへ……………201

白衣はくいの老人ろうじん……………251

草原の風

中卷

拳きよ

兵へい



しやうりよう
春陵は騒然^{そうぜん}となった。

ここが王莽^{おうもう}を打倒するための基地となったことを知った人々は、
はくしょう
「伯升に殺される」

と、恐怖の声を発して、逃げ匿^{かく}れた。伯升すなわち劉縯^{りゅうえん}が、春陵の人々を殺すはずはない。
劉縯が兵を挙^あげることによって、春陵が官軍の討伐^{とうばつ}目標にされて、住民はみな殺しにされると恐れたのである。

——ぞんがい兵は集まらない。

劉縯は焦^{あせ}りをおぼえた。

が、ほどなくうれしい異変が生じた。

いったん春陵から逃げだした人々がそろそろとどつてきたのである。

「どういうわけか」

劉縯は苦笑して首をかしげたが、春陵の人々を引き返させる力を弟の劉秀^{りゅうしゅう}がもっていることに、すぐには気づかなかつた。つまり、ここ春陵で挙兵して、南陽^{なんよう}郡の東南部にいる新市^{しんし}の兵^{へいりん}および平林^{へいりん}の兵が到着すれば、連合して北上を開始する、と決定したあと、劉秀が、

「絳衣大冠」

を身につけた。絳衣は深紅の衣服、大冠は武官がかぶる冠である。目がさめるようなあざやかな色の衣服は、たれの目にもとまり、

「あの謹嚴篤実な文叔でも、戦いにでるのか——」

と、住民はいちようにおどろいた。このおどろきは、

「文叔が征くのであれば、われわれもゆこう」

という誘いのことばに変わり、逃げだした人々も劉秀を慕ってかえってきた。

ついに劉縯は七、八千の兵を集めた。

「柱天都部」

劉縯の自称である。柱天は、おそらく天を支える柱ということで、都はすべて、部は部隊である。すべての部隊を率いる天下の中心、と劉縯は自身を称したのである。

平林の兵と新市の兵との交渉にあたったのは、劉嘉である。この人の誠懇さは、賊にも知られているはずである。ちなみに平林の兵の首領は陳牧であり、新市の兵のそれは王匡と王鳳である。

「わたしは蔡陽へ行ってきます」

と、劉秀は劉縯にことわった。劉秀にとって大切な人をこの企図に加えていない。叔父の劉良である。

出発するまえに劉秀は従者の伋きやうと妻の青せいを呼んだ。ふたりを坐らせた劉秀は、「義のために兵を挙ぎげることになった。わたしは戦場に伋をつれてゆきたくないが、伋はかつてについてくるだろう。それゆえ伋にいうことはない。が、青には、いわなければならぬ」と、めずらしく強い声でいった。青はかたずをのんだ。

「兵を率いて起たつ諸將の多くは、自身の陣営じんえいに家族や親戚をいれて、かれらを養いつつ戦うだろう。連戦連勝すれば、扶養ふようの人々が危難にさらされることはない。しかし、一敗地いっばいちにまみれると、諸將はおのれの身を護まもるのがせいっぱいで、家族や親戚にかまつていられない。すると武器をもたない人々は、逃げまどうだけで、老人や子どもも、官軍に殺される。それゆえ、青よ、そなたの子と親戚の子をつれて、いますぐここをでよ。半年分の食料をもつてゆくがよい。そなたの夫やわたしは戦死したときいても、仇あだを討うとうとは考えるな。それを考えると、人生が重くなりすぎる。なお、由ゆうは十四歳なので、従軍に堪たえられよう。ここに残のこしてくれ。わかつたな」

劉秀のことばが終わると、青は声を放はなつて泣いた。が、その声を背そむきいて、劉秀は由しやうを随したがえて発たつた。

蔡陽にはいり、叔父の家の門前に立つと、絳衣大冠きに着替かえた。

「叔父上、文叔です——」

大きな声である。叔父の劉良は家にあがってきた劉秀をみるや、

「なんぞや、その衣冠いかんは——」

と、目を瞋いからせて、叱しつ声を放はなつた。

だが、劉秀はひるまず、おもむろに坐まつて、

「春陵で、挙兵することになりました」

と、叔父をみあげつつ、昂奮こうふんをおさえていった。いまいましげに劉秀を視みた劉良は腰をおろした。まなざしに、怒りのほかにさびしさがある。

「なんじは兄の伯升とは志操しそうがちがうはずだ。いま伯升は家を危うくし滅亡めつぼうさせようとしている。なんじはそれを止めるか、またはそこから離れなければならぬのに、共に謀叛むはんをおこなうとは――」

叔父は良識りようしきの人である。かならずそういうであろうと想おもい、弁解べんかいの辞ことばを胸裡きようりでくりかえしてきた。が、辞の多さは志こころざしの卑ひくさ、決意の鈍にぶさを表あらわすとおもいなおし、

「宗家そうかが起つのです。分家は従わねばなりません」

とだけ、いった。

「宗家の巨伯きよはくさまは温雅おんがな人であり、叛逆はんぎやくをたくらむはずがない。すべてはなんじの兄の暴挙である。さあ、でてゆけ、謀叛人め。われはこれから、なんじらの謀叛げんゆうを嚴尤將軍に告げに行いく」

劉秀はたたきだされた。眉まゆをひそめて由よしが趨はしり寄つてきたので、軽く笑つた劉秀は、
「腹はらがへつた。脯ほしにくをもつてきただろう、それを食べよう」

と、路傍ろぼうに坐った。

なにしろ劉秀の衣冠はめだつ。路を通る者はすぐに目をとめて、

「おや、文叔さんじゃないか」

と、いぶかしげに声をかけた。

「そうです」

「そのかつこうは——」

「これです」

劉秀は弓を引くまねをしてみせた。

「へえ……」

このようにおどろいた者が数人になると、近所でうわさが飛び交い、

「文叔ちゃんが戦いにでるのですって」

と、女たちが大さわぎをしはじめた。おなじころ劉良は家人かじんに、秀がどうしているか、みてこい、といった。

すぐにもどってきた家人は、笑いを嚙かみ殺している。

「文叔さまは、近所の人たちと話しながら、脯を食べています」

この劉秀ののどかなゆとりが、劉良の心を変化させた。

「秀を呼んでこい」

ふたたび眼前に立った劉秀にむかつて劉良は、

「謀叛人め」

と、大声でののしった。が、劉秀は眉ひとつ動かさず、

「ひとぎきの悪いことを大声で話すものではありません」

と、たしなめ、さらに劉良に近づいて、

「いつ嚴尤將軍のもとにゆかれるのですか」

と、問うた。劉秀は叔父が密告者になってもかまわないとおもっている。すでに春陵に兵が集まりつつあることを郡府は察知しているであろう。州郡の兵によつて一挙が潰されれば、劉氏一門は全滅する。そのなかでせめて生きのびる家があつてよい。劉良のような穩健な人を戦場にひきずりだすために劉秀はきたわけではない。いわば別れを告げにきたのである。

劉秀を睨んでいた劉良は、急に眼光を弱めて、

「まあ、坐れ」

と、いい、嘆息しつつ腰をおろした。

「良く治められている世であれば、なんじが官吏として榮達してゆく道はひらかれていたはずだ。が、いまの世は暗黒だ。人々は光を失つて、さまよい歩いている。われがなんじらの企てを、どうして密告しようや。なんじの覚悟を見定めようとしたただけだ。宗家が起つというのであれば、われ独り、拱手しているわけにもゆくまい。なんじが血の川を渉り、棘の山を越えてゆくのなら、